

るか　　にま　　あき　　のり

にしてその思想は形成されたのであるか。その思想確立に重要な意味をもつと思われるデュルケムの人間関係如何。その思想の果たした役割。およびその思想の発展等の解明を行なった。

その結果、デュルケム社会学の研究分野は広義の道德社会学であり、その中心点は道德教育にあった。すなわち社会が個人に実現させ得るものは、集合意識によって作られた社会が包含する理想型であるとするデュルケムは教育理念として「ユマニテ」を説いたのである。さらに彼の宗教生活の研究は、当初社会集団特有の伝統や文化によって一方的に拘束されていた社会中心的思考が、社会の発展につれて多くの社会集団との交渉、相互の思想交換により思考は主観的要素を脱却して、普遍性、一般性をもつようになってきたことを明示する。そしてその「社会的経験」によって論理的思惟の起源を明確にすることにより、認識論に於ける経験論と観念論との対立に終止符を打ったものといえる。その社会的後天性を強調した認識論に於いて、彼の教育論は結実したものであるといえるのである。次に、デュルケムによって組織化された社会学の内容は、フランスの伝統的思想である実証主義思想の中にその素材は準備され、そしてこれらの素材が普仏戦後のフランスの道德的再組織という願望によって綜合されたものであり、とくに大革命以来発展して来た非宗教化運動（市民社会の成立）を背景としていることが明らかになったのである。すなわち第三共和国は教育の普及拡充によってまさに社会的解放という事業を行ない、教育によってフランスの道德的統一を回ったのである。この非宗教化の問題は弱極に於いては道德教育に帰するものであり、デュルケムはコントの実証主義思想を継承することによって、道德の科学的研究を社会学によってすすめながら道德の合理化によってより豊富な道德の確立に努め、非宗教的道德教育を指導したのであった。この科学的社会学的道德教育思想が国家の指導原理とされたことは、誕生まもない国家による初等教育に精神的な基礎を与えることになり、この普通教育に対する精神的基礎の確立はそのまま近代学校制度の完成を意味するものであるから、デュルケムの道德教育思想は、大いに国家の民主化をすすめるとともに、教育の進化を結果することになったといえるのである。

デュルケムにとっては、科学と民主主義とは相互に補強し合うものと考えられていたのであって、これこそ彼がコントを学ぶことによってアンシクロペディスト以来のフランスの伝統思想を継承して来た証拠である。従って、教育理念として「ユマニテ」を説いたデュルケムは、方法論に於いては実証主義、その内容は漸次観念論的立場へと進んでは行ったが、民主主義的・人道主義的な価値の鼓吹者としての活動に於いて少しも動揺することのなかった一大思想家であった。極言すれば、その科学的合理的道德教育論は啓蒙思想によって導かれたフランス大革命精神を継承完成化したものであり、デュルケムこそ啓蒙思想の真の子であったと見る事ができる。だからこそ、その社会学主義は十九世紀後半から二十世紀初にかけてフランスを代表する思想となったの

である。

デュルケムのオリジナリテは、道德科学の發生を人間理性の進歩の結果、すなわちフランスの根底を流れる合理的科学的精神そのものの本質的要請に基く現代的帰結であるとして、その比類なき努力によって先駆者の遺業を整理し、客観的、帰納的、分析的科学である社会学の方法と体系を確立したことである。これが科学的であるが故により普遍的であり、現代社会学の祖といわれる所以である。また、その社会学の形成過程に於いては、個人的にL. リアルやF. ビュイソン等との親交により、自己の研究を確立すべく常に動機づけられていたと同時に、デュルケムがその研究に際して弟子の養成につとめるとともに、「社会学年報」を中心に共同研究の体制で臨んだことは、社会学主義の発展にとって重要な意味をもつことが明らかになった。「社会学年報」中心に集まった研究者達は、デュルケム社会学の単なる祖述者ではなく、或いはそれから出発し、或いはそれを採用しながらも、デュルケムよりも包括的で柔軟な研究方法を以て、それぞれ独自の研究をすすめているにも拘らず、共同研究体制の故に彼らの多方面に亘る業績が、結局デュルケム社会学体系の一層の具体化を示すことになり、それが社会学主義を広め、その盟主であったデュルケムの名を一層栄誉あるものになっていることがわかるのである。

なお、このような思想—社会—学者の相互的解明は、一方に於いて学説の論理的発展過程を明らかにするとともに、他方に於いてその学問に従事した学者の研究をも含むものであるから、その結果として人格形成の過程をも取扱うことになり、教育の実践に示唆的な内容をより多く含んでいると言えるのである。

## 論文審査結果の要旨

第一部 序論 研究方法と対象——思想社会学についての試論

第二部 E・デュルケムの教育思想

第三部 非宗教化政策とE・デュルケムの教育思想

第四部 ソシオロジズムの発展

第五部 結 論

附 論 E・デュルケム、トテニスムについて(翻訳)

本論文は、その構成からもうかがわれるように、著者が構想する思想社会学の立場から、フランスの社会学者エミール・デュルケムの研究を通じて、フランスにおける社会学的教育思想の形成過程を論究したものである。

本論文に示された著者の基本的な研究態度は、デュルケムの教育思想が彼の社会学によってど

のように理論的に確立され、実践的にはどのような社会的要請に対応するものであったか、また、彼の社会学的教育思想が形成された当時の知的雰囲気や学問的伝統がいかなるものであったか、について、これを思想——社会——人間（研究者）の三側面から克明に追求しようとするものであり、著者のいわゆる思想社会学を構成しようとするものである。

著者のこのような意図は、とくに第二部および第三部においていかに発揮されている。すなわち、デュルケムが提示した教育論は、彼の社会学——なにかんずく道德社会学によって、その理論的骨子が用意され、彼の全社会学体系と不即不離の関係にあることが論証されている。とくに、デュルケムの集合表象理論、ユマニテの理念、道徳理論および認識理論と教育論との内在的関連を論理的に追求し、結局、彼の社会学的立場を最も端的に代表する道德社会学がその教育思想の土台であることを、龐大なデュルケムの諸著作をよく消化した上で、論証することに一応の成功をおさめている（第二部）。

つぎに、デュルケムの教育理論の実践的側面として、とくに彼の非宗教的合理主義的教育理論が、フランス革命以来、第三共和政によってほぼ確立された国家と宗教の分離という非宗教化政策に対応するものであること。とりわけ彼の道德社会学に基礎をおいた教育理論が、その非宗教化教育運動の思想的根拠となりえたゆえんを、広汎な非宗教化政策の歴史的展望のうちにとらえている。また同時に、この運動の過程で、彼が私淑したc h. ルヌーヴィエや、学友J. ジョレスとの思想的かわり、F. ビュイツソンやL. リアルなどの教育行政官らとの交渉や思想的交流や、デュルケムの実践的関心を方向づけていった過程が充分に論述されている（第三部）。さらに、デュルケムの思想的立場が多くの共鳴者や学問的後継者によって、いわゆるソシオロジスムの展開として開花される状況が、いちいちの研究者の学問的系譜を追って述べられ、デュルケム社会学の発展についての展望をよく消化していることが認められる。（第四部）。

以上によって、著者の企図する思想社会学の構成は、いちおうの成果は収めているが、すでに社会学の分野として定着をみている知識社会学と著者の構想との関連に不明さが残されており、方法論的な不備をまぬかれていない。また、デュルケムが社会学の各分野で果した業績と教育理論の相互の内在的関連について、道德社会学を強調するあまり一貫した論究にやや欠けるうらみがある。さらに、第三共和政の非宗教化政策については、資料、文献の精選にやや難点がみられ、この政策とデュルケム理論との関わりに不分明さが残されている。

しかし、これらの難点にもかかわらず、デュルケムの社会学および教育理論についての理解は、十分にゆきとどいており、附論に示されているように、フランス語の読解力についてもすぐれている。とくに、思想社会学という独自の構成において、多少の難点を残しつつもおおむね著者の意図は貫かれており、大きな破綻はないと考えられる。なにかんずく、社会学的教育思想の一展開過程を示すものとして、わが国の学界にひとつの貢献をもたらしうるものとみてよい。以上の点からみて、本論文は教育学博士を授与するに十分な成果をあげたものと認定する。